

週日の説教

金 大烈 神父 2010年4月28日(水)

《御言葉が基準》

おはようございます

『わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしが語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。』今日読んだ福音(ヨハネ 12・44-50)の内容ですよね。どういう意味でしょうか。そして、『わたしは光として世に来た。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。』とあります。結局、私達は二つのことを考えなければなりません。私達はイエス様の、神様の寛大な心を信じています。「信じていますよね、皆様！」それを信じることはとても大事なことです。私達がどんな罪を犯しても、神様の御前にひざまずいて「本当に悪かったのです。」と赦しを願う心を現せば、神様が赦して下さることを私達は信じています。しかし、もう一つ考えなければならないことがあります。それは“神様の寛大さを利用してはいけない”ということです。何でも赦して下さる神様だから「これはもういいよ、たいしたことではない。」とって自分を合理化してしまい、罪を犯してしまうことが癖になってはいけない姿勢だと思います。

さあ皆様、私達はこの世の中では裁かれないと思います。しかし、いつか私達が逝かなければならない、呼び掛けられて、逝かなければならない時が来るでしょう。イエス様がよくおっしゃった“時が来ている”そのような体験がいつか来ますよね。その時にはイエス様の御言葉、神様の御言葉が基準になって、私達が上手に生きて来たのかどうか、判明されると思います。とにかく、私達は、その御言葉が私達の永遠の命になるか、そうじゃないかの基準になることを、意識しながら、自分をいつも反省するべきだと思ってみました。しかし、「皆様は大丈夫ですよ。それなりに善く見えますのであまりがっかりなさらないで下さい。」このような気持で、心で歩みましょう。

さあ、ある信者さんがいました。その方は神様に相応しい、御心にかなう者として、正しい生き方をしようと強い望みを持っていた人です。ところがある日、嫌な人の姿が自分の目に映りました。出来るだけその人を意識しないように、自分のペースで信仰の生活をしようとしたのですが、ミサにかかっても、その人の後頭を見ただけでも、心が騒がしく感謝することも出来なくなってしまいました。喜びも感じられなくなりました。そして、どうしてもその人を考えると頭が痛くなって、教会に行きたくない気持になってしまいます。ですから、その方は自分の心を痛めながら、ひとつの決心をします。「やはり信仰者として、祈りによってこれを乗り越えよう」と。毎日その人から、その人への憎しみから開放されるように祈ります。しかし、毎日そのようにしようとすればするほど、その人があまりにも強く自分の中に浮かんでくるので、もっと辛い気持になって、「主よ、私はあなたの御言葉に従って嫌だと思ふ人を赦す恵みを、嫌な人から開放される恵みを祈り求めたのですが、あなたは何故そ

の恵みを下さらないのですか。」と神様に文句を言いました。しばらく時を経て、それに答えてイエス様がおっしゃいました。「私はあなたの願いを聞き入れたくないのですよ。」「どうしてですか？」「なぜなら、このような事がなかったら、痛みがなかったら、あなたは私の前にひざまずかないでしょう」と。

私達はそれぞれに色々な痛みを持っていますよね。もし、まったく痛みがなかったら私達はどのような生き方をしているのでしょうか。痛みがなかったら多分このように、平日のミサに与かることも少ないでしょう。痛みがあるから、悩みがあるから、心配があるから神様を拠りどころとして思い浮かべるのではないのでしょうか。結局この世の中、色々な難しさがあっても、むしろ難しさがあるからこそ、神様に傾くのではないのでしょうか。やっぱり私達は、自分に与えられている色々な痛みさえ、感謝すべきではないかと思ってみました。

そういう心がイエス様の御心だと思います。ある意味で「イエス様は、何故私に手を伸ばして下さらないのか。」と疑問を抱く時が結構あります。しかし、その時こそ、“誰よりも私のことをよく知っていていらっしゃるイエス様”を信頼しなければならないことを、もう一度考えてみましょう。

ありがとうございました。